

国 語 問 題

注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
2. この問題冊子は 24 ページです。落丁、乱丁、印刷不鮮明などの箇所がある場合には申し出てください。
3. 問題冊子および国語解答用紙（マークシート）と国語記述解答用紙が配布された後、各解答用紙の所定欄に座席番号・氏名・フリガナを正確に記入し、国語解答用紙の座席番号欄には座席番号を正しくマークしてください。
4. 解答は必ず国語解答用紙の指定された箇所に正しくマークし、記述式問題の解答は国語記述解答用紙に記述してください。マーク箇所を誤った解答は無効です。
5. マーク解答欄記入上の注意

- (1) 解答は指定された解答欄にマークし、その他の部分には何も書かないでください。例えば、

20

 と表示のある問いに対して、③と解答する場合には、次の例のように**解答番号 20**の**解答欄**の③にマークしてください。

例

良い例	悪い例
	

解答 番号	解 答 欄														
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮
20	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input checked="" type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

- (2) 複数の解答がある場合も、同じ解答欄にマークしてください。ただし、指示された解答数より多くマークした場合は、その解答はすべて不正解となります。
 - (3) 解答用紙へのマークはすべて HB のシャープペンシルまたは鉛筆で行い、訂正する場合にはプラスチック製消しゴムで丁寧によく消し、消しきずはきれいに取り除いてください。
 - (4) 解答用紙は絶対に汚さないでください。また折り曲げたり破ったりしないでください。
 - (5) 解答欄の所定欄以外の余白部分は、何も記入しないでください。記入したり、汚したりすると解答用紙読み取り時の誤読の原因となり、採点できない場合があります。
6. 国語記述解答用紙については、注意事項をよく読み、指定された設問について解答しなさい。
 7. 試験時間中に退場することはできません。
 8. 問題冊子は必ず持ち帰ってください。
 9. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。

I 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

人間が神仏を創ったのであって、神仏が人間を創ったわけではない。人間が人間たる特質ともいえる「自らの存在の意味を問い掛ける動物」として進化したキケツ^(ア)として、自らを制御する存在としての神仏をソウゾウ^(イ)せざるをえなかったのである。

最新の脳科学の進歩を踏まえたスタンフォード大学の精神医学者E・フラー・トリーの『神は、脳がつくった』(ダイヤモンド社、二〇一八年)は、こうした認識を確認する上で有効な論稿で、脳の進化の過程において人間が神を必要としたことを説得的に検証している。ホモ・サピエンスが、約一〇万年前以降に「自分自身を考える内省能力」を発達させ、約四万年前以降に「自伝的記憶」(自分の死を超えて将来に投影する能力)を獲得し、そうした認知能力の進化が農耕革命、定住革命につながり、⁽¹⁾「一万年から七〇〇〇年前」の時点で「概念的な神々」を意識するに至ったというのである。

人間、ホモ・サピエンスの脳は一・五kg程度といわれる。体重の三〇分の一にも満たない脳が人体のエネルギーの四分の一以上を消費するといふ。認知革命を経た人類が約六万年前、アフリカからユーラシアへと移動し、環境に適応しながら旅を続け、約一万年前に定住革命を迎えたこと、そして約五〇〇〇年前の人類が実現したシユメル都市文明が生んだシユメル文字の粘土板、その人類最古の文字で描かれた神話に多くの神々が描かれていることについてはすでに論じた。

人間はいつ宗教心を持つに至ったのか。人間が人智を超えた「聖なるもの」に魅かれ、内なる価値に動かされて「回心」する起点は何か。そして二五〇〇年ほど前、**A** B C五〇〇年頃に、なぜ今日の世界宗教の中核を占める中東一神教(起源としてのユダヤ教)、仏教、儒教(世界宗教とはいえぬが)が、ほぼ同じくして誕生したのか。人類史における宗教の意味を再考しておきたい。

^{*2} R・ドーキンスの『神は妄想である——宗教との決別』(早川書房、二〇〇七年)が語る「宗教はストレスを減らすことで寿命を延ばす偽薬である」という見解が真理だとしても、宗教が人間の切なる願望の表象であり、人間という動物の特質の投影でもあることを直視しなければならぬ。ここで重要なのは、宗教とは何かということだが、人類は二足歩行と脳の進化を経た認知革命の先に「聖なるもの」を設定し、それに頭を垂れることで、自らの精神を制御してきたといえ、宗教の起源は「聖なる事象」への気づきにあるといえる。⁽²⁾

約二〇万年前にアフリカ大陸に登場したホモ・サピエンスが、一〇万年前頃から認知革命の中で「自らを見つめる内省能力」を身につけ始め、

約六万年前にユーラシア大陸への「グレート・ジャーニー」と呼ばれる移動を開始したことはすでに触れたが、人類は移動を通じて「人間という存在への無力感」を味わい、自然の驚異と偉大さに靈性を感じたのであろう。「太陽の美しさと恵み」「そそり立つ山岳の壁」「一木一草にも命」を感じ「聖なるものを設定」する心情が高まったであろう。無生物にも「アニマ」(anima)、すなわち靈魂が存在するという信念が、自らを律する心性に芽生えたことは重い一歩であった。人類が自然との対峙・格闘・共生を通じてアニミズム的志向を身につけていったという視点は、宗教の淵源を考える上で納得のいくものである。

一九世紀の文化人類学者エドワード・タイラー(一八三三―一九一七年)は宗教学の先駆的研究ともいえる『原始文化——神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究』(誠信書房、一九六二年、原書一八七一年)において——彼は一七世紀に日本を訪れたケンペルの『日本誌』さえ参照して日本宗教の研究にまで踏み込んでいるのだが——独自の宗教進化論を展開し、宗教は「アニミズム―多神教―一神教」と進化してきたという考え方を展開した。一九世紀という時代を背景にした西欧・キリスト教優位の宗教観であり、未開・非文明においてはアニミズムとフェティシズム(偶像崇拜、呪物崇拜)が支配的で、それが多神教へと進化、さらに文明化とともに一神教へと成熟していくという捉え方であった。こうした認識の限界は、⁽³⁾現代社会にも現存するアニミズムを観察すれば明らかである。アニミズムは未開社会の特質ではなく、時代を超えた人間の特質ともいえるのである。ウォルト・ディズニーはネズミに人間の心を持たせて「ミッキーマウス」なる存在を生み出した。世界中の子どもはディズニー・アニメに登場する動物に心を寄せ、擬人化して考えている。

また、地球環境の保持に関心を抱く人の中には、近代社会を貫く「人間中心主義」の世界観に疑問を抱き、「多様な生物が共生する地球」をキ⁽⁴⁾キユウすることを主張するが、これも形を変えたアニミズムともいえる。

現代におけるフェティシズムにも気づかざるをえない。**B**、商業主義によって増幅されたブランド商品への信奉は凄まじく、これこそ呪物崇拜の延長ともいえる。製品へのセンコウ⁽⁵⁾というレベルを超えて、高額のブランドに執着する「ブランドフェチ」は地上に蔓延^{まん}している。さらに、芸能の世界における「アイドル」(偶像)なる存在に熱狂する空気こそ、文字通り「偶像崇拜」以外の何ものでもない。アイドル・グループに「神セブン」という言葉が使われ、「神ってる」という表現が飛び交う現代社会は、究極の「多神教」状態にあるともいえる。我々自身がアニミズムとフェティシズムを生きているのである。

あらためて宗教なるものの本質を熟慮するならば、宗教は人間の心における二つの要素の淵源をもつといえる。

一つは、ここで論じてきた「聖なるもの」への意識である。そして、もう一つが、心の内なる価値への意識であり、自らを律する規範への目覚めである。⁽⁴⁾

そこで、人類史における内面的価値、「道德の誕生」に関心が向かわざるをえない。南カリフォルニア大学の人類学者クリストファー・ボームは『モラルの起源』（白揚社、二〇一四年）において、道德、良心、利他行動の進化について論じている。彼は「血縁を超えた他者に対する寛大さ（モラル）は、集団内の「黄金律」として、集団を効果的にまとめる上で有効だからという社会的環境によって生まれた」と考え、「およそ一五万年前」のアフリカにおけるホモ・サピエンスにモラルの起源を求めている。

C、人間にだけ道德性があると考えられることは正しくないようだ。霊長類の社会的知能研究の第一人者フランス・ドゥ・ヴァールの『道德性の起源——ボノボが教えてくれること』（紀伊國屋書店、二〇一四年）は、類人猿ボノボの研究を通じて、「道德性とは神から押し付けられたものでも、人間の理性から導かれた原理に由来するものでもなく、進化の過程で動物が営む社会生活の必然から生じた。相手を思いやり、助け合い、ルールを守り、公平にやるのは動物も人間も同じだ」と論ずる。

また、英国の科学ジャーナリスト、ニコラス・ウェイドは、『宗教を生み出す本能——進化論からみたヒトと信仰』（NTT出版、二〇一一年）において、「言語と宗教こそ、人間の学習能力の上に築かれた複雑な文化行為」と述べ、「人は一人で話す、祈るのではなく、共にコミュニケーションすることで納得し、落ち着く」と語る。つまり、「宗教とは、感情に働きかけ、人々を結束させる信念と実践のシステム」であり、社会的関係性の中で自らの位置を問ひ掛け、共有できる価値に向き合う視界が生まれると考えるべきなのであろう。

つまり、約一万年前とされる⁽⁵⁾定住革命の過程で、人間社会には移動を続ける部族とは異なる次元での共同体が生まれ、近隣の共同体との関係性が生じた。それは、「嫌いな奴とは別れて移動することから、「嫌いな奴とも何とか共存しなければならない」という状況が生まれ、社会の良好な関係を保つための自制心、他者への配慮が必要になった。それは、次に論及する「世界宗教」の誕生のフクセン⁽⁶⁾になったといえる。

（寺島実郎『人間と宗教』より。出題にあたって本文を一部改変した）

*注1 シュメル都市文明

シュメールとも書く。紀元前三〇〇〇年紀にメソポタミア南部に興ったシュメール語を使用した文明。

2 R・ドーキンス

イギリスの進化生物学者・動物行動学者。

3 ウォルト・ディズニー

アメリカ合衆国のアニメーター・プロデューサー・実業家。

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)・(オ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせになるように漢字を二つずつ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア)

(イ)

(ウ)

(エ)

(オ)

(解答例) コウケン

- ① 高
- ② 貢
- ③ 工
- ④ 功
- ⑤ 幸
- ⑥ 猷
- ⑦ 権
- ⑧ 堅
- ⑨ 謙
- ⑩ 件

答 ② ⑥

(ア) キケツ

- ① 既
- ② 起
- ③ 棄
- ④ 岐
- ⑤ 帰
- ⑥ 決
- ⑦ 潔
- ⑧ 結
- ⑨ 傑
- ⑩ 欠

(イ) ソウゾウ

- ① 宗
- ② 相
- ③ 創
- ④ 装
- ⑤ 操
- ⑥ 象
- ⑦ 造
- ⑧ 憎
- ⑨ 蔵
- ⑩ 増

(ウ) キキユウ

- ① 希
- ② 季
- ③ 期
- ④ 機
- ⑤ 奇
- ⑥ 及
- ⑦ 急
- ⑧ 求
- ⑨ 究
- ⑩ 救

(エ) センコウ

- ① 選
- ② 詮
- ③ 専
- ④ 旋
- ⑤ 先
- ⑥ 項
- ⑦ 行
- ⑧ 効
- ⑨ 孝
- ⑩ 好

(オ) フクセン

- ① 副
- ② 複
- ③ 服
- ④ 伏
- ⑤ 幅
- ⑥ 宣
- ⑦ 専
- ⑧ 占
- ⑨ 線
- ⑩ 船

問二 空欄 **A** ・ **B** ・ **C** に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

6

- | | | | |
|---|--------|--------|--------|
| ① | A つまり | B ただし | C たとえば |
| ② | A いっぽう | B すなわち | C つまり |
| ③ | A または | B しかし | C すなわち |
| ④ | A つまり | B たとえば | C ただし |
| ⑤ | A または | B たとえば | C すなわち |

問三 傍線部(1)「一万年から七〇〇〇年前」の時点で「概念的な神々」を意識するに至った」とあるが、ここに至るまでの過程で起こった出来事として適切でないものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

7

- ① 定住革命を迎えたこと
- ② ボノボの道徳性が人類に伝わったこと
- ③ ユーラシア大陸への移動を開始したこと
- ④ 「自伝的記憶」を獲得したこと

問四 傍線部(2)「認知革命」とあるが、本文において筆者はどのようなことを「認知革命」と呼んでいるのか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

8

- ① 内省能力を発達させたこと
- ② 脳が神仏を創造したこと
- ③ 人間中心主義の世界観を否定したこと
- ④ 学習能力が文化的行為を牽引すると認識したこと

問五 傍線部(3)「現代社会にも現存するアニミズム」とあるが、「アニミズム」の説明として最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

9

- ① 人類が自然の偉大さを感じる中で生じた、自然界のあらゆる事物に靈魂が存在するという考え方
- ② 人間が移動を通じて無力感を味わたため、安堵する^どために動物を聖なるものとして設定するという考え方
- ③ 人間は人知を超えた「聖なるもの」に魅かれ、内なる価値に動かされて「回心」できるとい^う考え方
- ④ 動物に人間の心を持たせ、擬人化することで、動物に心を寄せることが可能になるとい^う考え方

問六 傍線部(4)「自らを律する規範への目覚め」とあるが、本文中での「規範」とはどのようなものか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

10

- ① 集団全体の寿命を延ばすために、ストレスを減らす目的で宗教を信仰する集団的信仰心
- ② 社会生活の必然から生まれた、人間だけが持っている、相手を思いやり、助け合う道徳性
- ③ 集団生活という社会的環境において互いの良好な関係を保つために生まれた、血縁を超えた他者への寛大さ
- ④ 進化した脳が自らを制御する存在として生み出した、神仏という概念

問七 傍線部(5)「定住革命」がもたらしたものは何か。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

11

- ① 部族の移動
- ② 脳の進化
- ③ 道徳性
- ④ 人間中心主義

問八 本文の内容に一致しないものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

12

- ① 人類が、認知革命を経て、自然との対峙・格闘・共生の中でアニミズム的志向を身につけていったという視点は、宗教の起源を考える上で重要である。
- ② 人間が人智を超えた「聖なるもの」に魅かれ、内なる価値に動かされて「回心」する理由は、ストレスを減らすことで寿命を延ばすためである。
- ③ 未開・非文明においてはアニミズムとフェティシズムが支配的で、それが多神教へと進化、さらに文明化とともに一神教へと成熟していくという捉え方には限界がある。
- ④ 高額のブランドに執着する「ブランドフェチ」の蔓延や、芸能の世界における「アイドル」（偶像）なる存在に熱狂する文字通りの「偶像崇拜」は、現代におけるフェティシズムである。
- ⑤ 言語と宗教こそ、人間の学習能力の上に築かれた複雑な文化行為であり、進化の過程で動物が営む社会生活の必然から生じたことが類人猿ボノボの研究から明らかになった。
- ⑥ 宗教は、自制心と他者への配慮、「聖なるものを設定」する心情の高まり、という人間の心における二つの要素に淵源をもつといえる。

Ⅱ 次の文章は高橋たか子の「病身」という作品の一節である。よく読んで後の設問に答えなさい。

彼女は彼の体の具合を訊ねるのが習慣になっている。なぜなら、彼は常時いたところに故障があったし、また、見るからに内部に病いをかかえているといった繊細すぎる外見だったからである。

「体の具合はどう？」

と、彼女は毎度のように、受話器にむけて言う。

「うん、あまりよくない」

と、彼も毎度のように言う。電話線をとおすと、「うん」が「むん」に聞え、どこか甘えのこもったひびきになる。

「どこがわるいの？」

彼女は儀式のようになった言葉^(a)を言う。

「ちょっと風邪ひいてる」

彼はそのことを示すためか鼻をくすくすんとさせる。

「あら、ほんと、あなたの鼻の音ね」

(1) 彼女ははしゃいだ気分になる。

電話線のむこうに彼の白い鼻の先のあるのがありありと感じられる。すんなりと先が細くなっていて、冷たい。けれども、そこから、彼女の知りようもない彼という他人の内部の、ほのあたたかい気配が、息となって出ている。

「鼻が見えるようよ」

彼女は笑って言う。

「そうですか」

すこし不機嫌な声を、彼はだす。いま彼女が彼をたのしんだからだろう。彼はそれどころではない。風邪をひいて具合がわるいのだ。

「それだけ？ わるいのは鼻だけ？」

彼女は貪欲^(b)になっていく自分を感じながら、また言う。

「喉もちよっと痛い」

「咳^{せき}がでるの？」

彼は答えるかわりに、こほんこほんという音をつたえてくる。きっと喉の粘膜までが普通の人の何倍も繊細なのだ、と彼女は考える。だが、そのずっと奥の見えない内部は、いったいぜんたいどんなふうになっているのだろう。色合い、形、手ざわり、そしてもっと別なもの、それを見た
い知りたい。

「もう一度、咳をしてみてください」

と彼女は言ったが、何の音もつたえられてはこない。またしても彼女が彼をたのしんでいることが彼にわかるからだろう。

いつかの朝、仰向けに寝ている彼の喉を締めたことがあった。彼はじっとして声もたえず、されるがままになっていた。ところが、彼女が手をはなして暫く^{しばらく}すると、ゼンマイのこわれかけた時計が鳴りだす前のような、何かの気配が彼の内部から起った。それがずんずん持ちあげられてくるらしい様子を、彼女が息をつめてギョウウシ^(ア)していると、やがて、こほんこほん咳がでたのであった。

「さつき^{*1}エリック・サティを聴いていたんだ」

彼は話題を変える。

「あら、体の具合がわるいのに？」

彼女にはとても意外な気がする。

「ジムノペディってのはいいねえ」

彼は「いいねえ」のところですこし声を高音にして言う。

あの透きとおる懶惰^{*2}な音が彼女の耳に聞えてくるようだ。それはたっただいままで彼の部屋の白い四角い空間を充たしていて、そこに彼の肉体がゆあみしていた。彼の肉体の香りがすこし染みついてしまったそんな音の名残りを、いま彼女は電話線をとおして聴きとろうとする。

「体の具合がわるいのに音楽が聴けるなんて」

彼女はそこにこだわっている。風邪をひいている男の内部に音楽はどういうふうにして入り込めるのか。病いと音楽とが内部でどう和解す

るのか。だが、そんな質問にたいする答えは、もともと無理というものだろう。ことは単に、彼女は病気なら音楽を聴くどころではない気分になるが、彼はそれができる人だということなのだから。

「不思議だわ」

と、彼女は言っておく。

「何が？」

きよんとした声で彼は言う。

「あなたという人が。あなたの内部が」

彼女がこういふふうこうに嵩こじてくると彼は取り合あわないのが常である。

「熱はあるの？」

彼女は質問にもどる。

「すこし微熱がある」

彼は何度言いわされたかわからないセリフを言う。

「どんな感じかしら？」

「もういいよ」

「いいえ、知りたいのよ、言いってちょうだい」

「だるい」

と、それでも彼は素直に言う。

「どこが？ 頭あたまが？ 体からだが？」

「全部」

「そう、全部なのね」

熱を手掛かりにして彼の全身にいきわたりたい。そうすることで彼がもつとわかるだろう。

「じゃあ、熱と鼻と喉、わるいところはそれだけね」

彼女は結論として医者のように断定的に言う。だが、医者は分析するが、彼女はそうではない。彼女は彼を、彼が自分自身を感じるのと同じように感じたいのだ。

「胃の具合もよくないんだ」

まるで宝を出しおしみていたように、彼はいまごろになって言う。

「まあ!!」

彼女ははずんでくる。また手がかりがあたえられたからである。

「どんなふうに?」

性懲りもなく、訊ねにかかる。

「すこし吐気がする」

これも彼が何度言ったか知れないセリフである。⁽²⁾ 何度言っても決して手垢^{あか}がつかないという奇妙さがある。なぜなら、毎度毎度たしかに彼は病気なのであり、自分の現状を切実に表現しているからであるが、また彼女のほうでも、いつも新鮮な期待をもって耳を傾けているからでもある。

「吐いたの?」

「ゆうべ夜中に吐気がした」

「でも吐きはしなかったのね」

「最近いつも夜中になると吐気がする」

「吐気だけ? なぜかしら?」

「昔からそうですよ。ときどきそうなる」

「知ってるわ。不思議ねえ」

と、また彼女は言い、彼の内部に巢喰^くっている吐気というものを、手でつかめないもどかしさをおぼえる。それは不可解きわまるものに思えてくる。わるいものを食べたり酒を飲みすぎたりして吐気がするなら、物理的にわかる。けれども、はっきりした理由もなしに生じてくるらしいの

だ。最近いつも夜中になると彼のなかに物のように居据^{いす}つてしまう吐気、理由がわからないので除去することもできない吐気、まるで彼そのものの謎みたいな吐気である。

そのことから彼女は或る場面を思い出す。その時もやはり彼は風邪をひいていた。喉が痛いというので彼女が飴^{あめ}をあたえた。トローチのようなもので薬草でできた茶色い飴である。彼は一つ手でつまみ、口にいれ、しゃぶった。窓の敷居に腰かけていたので、立っている彼女は彼の頭の上になんというともなく手を置いた。と、手に変なひびきがつたわってきた。そこで彼女は、手を置いていた彼の頭の上に自分の耳をあててみた。あきらかに、拡声器にかけたように大きく、耳に変なひびきがつたわってきた。彼女は事態のおかしさに笑いだした。何の音なのかと誰かに訊ねてみたくなるような音なのである。彼の頭蓋骨^{ずがいこつ}のなかのクウドウ⁽¹⁾でサイコロがころがっているとも思える。じっと耳を傾けていると、決してサイコロがころがったりはしない人間の頭のなかに、そんな音がしているという、内部の謎を聴いている気がしてくる。だが、はい、飴を口から出してくださいと言って、それを取り出してしまえば、謎はあっけなく解かれてしまうだろう。

たとえばそんなふうには、彼の病いの謎を取り出せないものか。そうすれば、彼⁽⁴⁾から彼自身が取り出せる気がするのだ。
「不思議な人ねえ」

三度目に言い、彼女は電話を切った。

人なんて貪欲に知ろうとすればするほどわからなくなる。

(中略)

彼女はいつの頃からか誰でも人と話をする時に、相手の口から出てくるあらゆる言葉に耳を傾けるようになっていた。そういう方針をとっているのではなく、しらずしらずにそんな習慣ができてしまっていた。相手が話す話の筋道をいっしょにたどっていく一方、筋道を言うために口にされる言葉の一つ一つを聞きのがさないのである。別な言葉でなくてなぜその言葉が選ばれたかという、選択の要に、じいっと注意していると、相手がよくわかってくる。誰においてもフキヨウ⁽²⁾和音のような言葉がちらつくものだが、それさえ、いや、それこそ、その人の内部の何かを映しているのだ、それをとおして相手がよくわかってくる。つまり、相手から出てくる言葉の一つ一つを、逆に溯^{さかのぼ}っていくと、その言葉の源である内部というものの感触が味わえる。

彼女は人と話をしていて、その人が自分自身について知っている以上に、その人のことを知っているつもりでいた。相手の意識しないところま

で彼女が自分のアンテナを伸ばしているからである。

ところが、そんな能力も、彼にたいする貪欲さを前にしてはたと壁にぶつかる。

(高橋たか子「病身」より。出題にあたって本文を一部改変した)

*注1 エリック・サティ (一八六六—一九二五年) フランスの作曲家。音楽界の異端児と呼ばれた。代表曲に「ジムノペディ」、

「リュ・トゥ・ヴ」がある。

2 懶惰な

なまけ怠るさま。ここでは、けだるいさま、アンニユイなさま。

問一 傍線部(ア)・(イ)・(ウ)のカタカナは漢字でどう書くか。解答例にならない、それぞれ①～⑩の中から正しい組み合わせになるように漢字を二つずつ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(ア)

(イ)

(ウ)

(解答例) トクテイ

- ① 得
- ② 徳
- ③ 特
- ④ 読
- ⑤ 督
- ⑥ 帝
- ⑦ 定
- ⑧ 低
- ⑨ 訂
- ⑩ 呈

答 ③ ⑦

(ア) ギョウシ

- ① 仰
- ② 業
- ③ 行
- ④ 凝
- ⑤ 形
- ⑥ 詞
- ⑦ 資
- ⑧ 視
- ⑨ 示
- ⑩ 志

(イ) クウドウ

- ① 空
- ② 宮
- ③ 遇
- ④ 功
- ⑤ 隅
- ⑥ 同
- ⑦ 道
- ⑧ 堂
- ⑨ 導
- ⑩ 洞

(ウ) フキョウ

- ① 付
- ② 普
- ③ 不
- ④ 符
- ⑤ 扶
- ⑥ 響
- ⑦ 共
- ⑧ 協
- ⑨ 狭
- ⑩ 興

問二 傍線部(a)・(b)の本文中の意味として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(a)

(b)

(a) 儀式のようになった言葉

① 相手に対して無関心でいい加減な言葉

② 神聖な会話にふさわしい厳かな言葉

③ いつも変わらない決まり切った言葉

④ 相手の言葉を巧みに引き出す思わせぶりの言葉

(b) 貪欲になっていく自分

① 具合が悪い彼の病原を特定すべく、執拗よつに問いかける自分

② 具合が悪い彼に頓着せず、自らの好奇心だけを追求する自分

③ 彼の内部を知るために、彼の言葉を勝手に解釈する自分

④ 具合が悪い彼を差し置いて、言葉のやりとりだけを楽しもうとする自分

問三 傍線部(1)「彼女ははしゃいだ気分になる」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

18

- ① 自らの内部を知ってもらおうべく、彼女に進んで鼻の音を聞かせた彼が、面白かったから。
- ② 彼が風邪によって鼻をならしたことで、電話の先にある彼の鼻の先が見えたように思ったから。
- ③ 彼という他人の内部が鼻息という形で伝わったことが意外で、おかしかったから。
- ④ 彼の内部を知るためにどうしても必要な彼の鼻の音を、彼から引き出せたから。
- ⑤ 外部からはうかがい知れない、彼という人の内部に触れた気がしたから。

問四 傍線部(2)「何度言っても決して手垢がつかないという奇妙さがある」とは、どういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

19

- ① 彼女は彼が常々訴える「少し吐気がする」という言葉を期待して聞くが、いつまでたっても彼を理解できず、疎外を感じる、ということ
- ② 彼は常々訴える「少し吐気がする」という言葉によって、彼女の彼に対する貪欲な追求を巧みに逃れている、ということ
- ③ 彼が訴える「少し吐気がする」という言葉自体は変わらないが、二人はいつでも病状に真摯しんしに向き合うため、言葉が古びることがない、ということ
- ④ 彼は自分について「少し吐気がする」という言葉で率直に表現しているが、彼女はそれをいつも勝手に読み替えてしまう、ということ
- ⑤ 彼女は彼の「少し吐気がする」という言葉を聞くたびに、新鮮な態度でそれを聞こうとするが、それはいつもつかみ所がなくごまかされてしまう、ということ

問五 傍線部(3)「まるで彼そのものの謎みたいな吐気である」とは、どういうことか。最も適切なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

20

- ① 明確な原因がわからないまま生じる彼の吐き気は、あたかも彼の内部の不可解さを象徴しているようである、ということ
- ② いつも理解不能な吐き気に悩まされる彼であるが、その吐き気は彼という人自身の不可解さから導かれるものである、ということ
- ③ 彼の本質を知るためには、まずなによりも彼を襲う吐気の不可解さこそ理解しなければならぬ、ということ
- ④ 彼の内部にある理解不能な吐気こそが、きっと彼という人の本質を分かりにくくしている、ということ
- ⑤ 彼を襲う吐気の原因を彼自ら説明できないことは、彼が自身の内部を彼女に説明できないことと同様である、ということ

問六 この文章の内容として適当でないものを、次の①～⑥の中から二つ選び、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

21

- ① 彼女は彼の病気から彼の内部を理解しようとしたが、それは結局彼という人の不可解さを明らかにするだけだった。
- ② 彼女が病中の彼の症状を執拗に問いただすのは、彼の病状をおもんばかったことだった。
- ③ 彼女は普段会話によって相手の内部をつかむことができるが、彼に対してはそれができなかった。
- ④ 彼女はなぜ彼が病中にあつても音楽を楽しむことができるのか、理解できなかった。
- ⑤ 彼は彼女の執拗な追求を避けるため、いつも彼女を煙に巻く受け答えばかりしていた。
- ⑥ 彼は自分の病状を彼女に伝えることによって、不可解な自分自身を知ることができた。

Ⅲ 以下のそれぞれの設問に答えなさい。

問一 次の(1)～(3)の熟語の対義語を、解答例にならない、それぞれ①～⑧の中から正しい組み合わせになるように漢字を二つずつ選び、順番は無視して、同一解答欄にその番号を両方ともマークしなさい。

(1)

(2)

(3)

(解答例) 拡大 ↑ ↓

- ① 小
- ② 尺
- ③ 縮
- ④ 弱
- ⑤ 減
- ⑥ 贈
- ⑦ 刷
- ⑧ 少

(1) 豊富 ↑ ↓

- ① 貧
- ② 少
- ③ 不
- ④ 欠
- ⑤ 量
- ⑥ 満
- ⑦ 乏
- ⑧ 膨

(2) 延長 ↑ ↓

- ① 小
- ② 短
- ③ 凝
- ④ 期
- ⑤ 縮
- ⑥ 予
- ⑦ 延
- ⑧ 猶

(3) 蓄積 ↑ ↓

- ① 低
- ② 消
- ③ 減
- ④ 摩
- ⑤ 退
- ⑥ 少
- ⑦ 耗
- ⑧ 化

答 ①
③

問二 次の(1)・(2)の文の傍線部と同じ漢字を用いるものを、それぞれ①～④の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

25

(2)

26

(1) 新しい洋服を着て鏡に姿をうつす。

① 長年の計画をついに実行にうつす時が来た。

② 黒板の文字をノートに書きうつす。

③ 撮影した映像をスクリーンにうつす。

④ 引っ越しをして住居をうつすことにした。

(2) 友人が推薦する映画をかんしょうした。

① かんしょう用の美しい花が栽培されている。

② 京都に出かけ美しく趣のある日本庭園をかんしょうする。

③ 親にかんしょうされてストレスを感じる。

④ 流行りのあの曲はかんしょう的な歌詞が特徴だ。

問三 次の(1)～(3)の四字熟語の空欄に入る漢字を、それぞれ①～⑤の中から一つ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

(2)

(3)

(1) 外 内剛

- ① 軟
- ② 重
- ③ 柔
- ④ 中
- ⑤ 獣

(2) 首尾

- ① 間
- ② 卷
- ③ 完
- ④ 環
- ⑤ 貫

(3) 五里 中

- ① 無
- ② 夢
- ③ 武
- ④ 霧
- ⑤ 矛

問四 次の(1)・(2)の言葉の意味として最も適切なものを、それぞれ①～⑤の中から一つずつ選び、その番号をマークしなさい。

(1)

30

(2)

31

(1) 情けは人の為ならず

- ① 人に親切にするのは相手のためではなく、自分の満足のためである。
- ② 人に親切にすれば、相手の役に立つことができる。
- ③ 人に親切にすれば、相手のためになるだけでなく、いつか自分に返ってくる。
- ④ 人に親切にすれば、相手から感謝され、自分も気持ちが良い。
- ⑤ 人に親切にするのは相手のためにならないのでやめたほうがよい。

(2) 飼い犬に手をかまれる

- ① 相手が強すぎてとても敵かなわないこと
- ② 臆病な人が虚勢を張ったり威張ったりすること
- ③ 仲の良い人に突然嫌われること
- ④ どんなに仲が良い人でも礼儀は必要であること
- ⑤ 普段からよくしている人に裏切られること